



# 一里塚

7期 伊藤 晴義

関ヶ原の戦い(1600年)が終わると、家康はいち早く街道の整備を行ない、宿場の大部分は慶長6年(1601)に整備された。

街道には問屋場をおき、旅行者に湯茶を与え、馬の斡旋もして、貨物や人馬の継立を円滑にしたが、更に街道の施設として、慶長9年(1604)になって『一里塚』をつくった。

この塚は沿道の両側に、一里(約4km)ごとに塚をつくって、人馬人足の駄賃を定める基となった。

東海道をはじめ五街道では、江戸日本橋(道標は現在も残っている)から、一里ずつに塚をおく制度である。

一里塚は5間(約9m)四方の四角形の塚で、その上には、中国が槐(エゾヅ)を植えたのにならい、槐を植えて沿道の松並木と区別した。

しかし、現存する一里塚の中には、松や椋(け)の木が植えられたところもあった。

この一里塚が置かれたのは、駄賃の計算上、里程を計る基礎にしたのであったが、旅人にとっても、一里塚によって旅程の距離を知る上にも便利であった。

愛知県の一里塚は、三河・尾張に18を数えたが、左右両塚が残っているのは2ヶ所、合わせても4ヶ所だけである。

## 現存する一里塚

西大平村(現岡崎市)	榎	左塚のみ現存
来迎寺村(〃)	松	左右とも現存
東阿野村(現知立市)	榎	左右とも現存
笠寺村(現名古屋市)	榎	右塚のみ現存

★美濃街道にも五街道なみに一里塚が作られたが、現在、現存するものはない。



大平一里塚



笠寺一里塚

# 伊勝村 昔の昭和区

8期 柴田 武

村名については「井河津」がつまったものか「このあたりの川は小さいが後津（いかだつ）の意味ではないか」とか、「弘法大師の法力により井戸の水が枯れたため、井湯の里とっていたのを伊勝村と言うようになった」等諸説があるが、いずれが正しいか明らかではない。

この村は東山丘陵の西部裾野に位置し、川名村の東北に隣接している。『寛文覚書』によれば、「名古屋へ一里八丁（4.8km）、平針へ一里半（9.5km）にあった村」という。ちょうど現在の名古屋大学西南、伊勝町、宮東町、前山町あたりが村の中心であった。

この村は、また水が豊富ではなかったようであり、徇行記によれば「伊勝村ニハ井戸ツツモナシ、昔弘法大師此所ニテ水ヲ乞給フニ郷人慳貧ニシテ水ハナシトテ不奉、ソレヨリ俄井ノ水ナクナリケル由、村ノ東ノ尾サキニ清水有ヲ汲ミテツカフト也」と言う伝説すらあった。

八事丘陵の裾野には、はたいぼ池、しらす池、いばら原池の3つの溜め池があり、これより引いた水を農業に利用していた。村のほぼ中央、御林道の北側には御器所村龍興寺の末寺である、禅宗の福寿山宝珠院が建っていた。

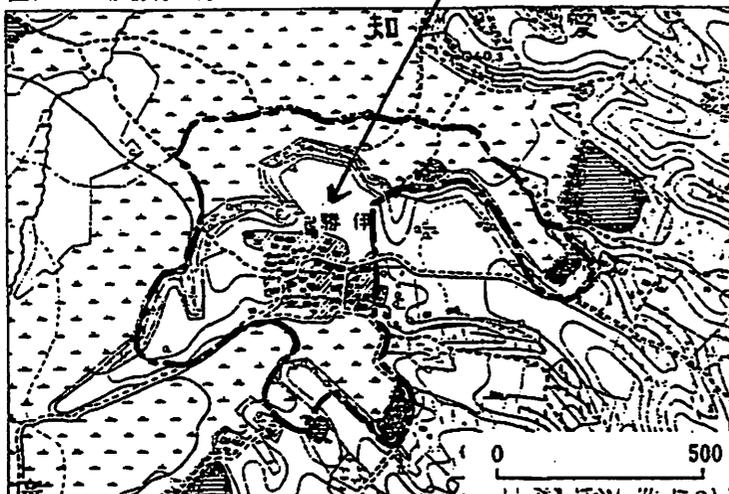
又八事丘陵にかかるところには、応神天皇を祭神とするとも言われる伊勝八幡宮があり、村人の信仰を集めていた。しかし村の規模が小さく、人口が少なかったためか他村に比べて寺社の数は少ない。

（資料：昭和区誌）

伊勝村の村域

宝珠院

図5-13 伊勝村の村域



## 訃報

久田忠義氏（4文）  
平成10年 1月16日  
ご逝去享年74歳

心よりご冥福をお  
祈り申し上げます。

# 神木

## オガタマノキ

8期 岩田 博

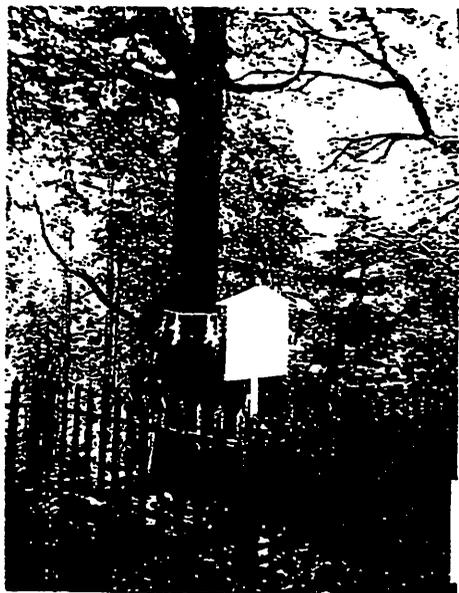
オガタマノキという樹木を知っていますか。どこの神社にも神木として植えられている  
そうですが ……………

実物を見たい方は御器所二丁目の尾陽神社まで足をおはこび下さい。境内の南東に植え  
られています。

### オガタマノキ (御賀玉樹、招霊樹)

オガタマノキはモクレン科に属する常緑樹で、3～4月白色で底部が紅紫色の香り  
のある花をつけます。オガタマという名は招霊 (オギタマ……神霊を招く) からき  
ています。

古代より、神前に供えて神霊を招き奉ったとされ、神社にとって最も貴重な尊い樹  
木です。現在は神前に奉る玉ぐしや降神に使う神籬 (ひるぎ) などは榊を使用しますが、  
古代はオガタマノキが主であったと言われ、倭姫命 (やまとひめのみこと) が伊勢の地に、初  
めて天照大神をお迎えされたときにも、心御柱 (しんのみはしら) の上にオガタマノキを神籬  
として立てられたとされています。



オガタマノキ (尾陽神社の神木)